

コロナ禍の 入院 介護 看取り 大きく変わった「お別れの流儀」

2021年 春号

終活
読本

ソナエ

vol.32

定価(本体880円+税)
NIKKO MOOK

入院
介護
看取り

コロナ禍の



女優 宮崎美子

特別インタビュー 林家たい平
1年半に両親と師匠を見送る
『会えずに後悔しないために』

遺贈寄付

誰でもできる
「最後の社会貢献」

(見送りのプロたち)

「ラストメモリー」を 演出したい

コロナ禍でも創意工夫を凝らす

人生や家族との日々を「素晴らしかった」と感じ、満足して旅立ちたい、見送ってあげたい。それは、誰もの願いです。こうした気持ちに応えようと奮闘し、新型コロナ禍でも工夫を凝らして取り組んでいる人たちがいます。最高のラストメモリーを演出するプロたちを紹介します。

2020年12月、がんで約1年の余命宣告を受けた関西在住の80代の男性が、北海道の新千歳空港に降り立つ。男性は「社会人として最初の赴任地 千歳市を訪れた。今宵、街並みを眺めてみたい」という願いを果たした。

男性に寄り添うのは、高齢者や障害者などハンディキャップを抱える人たちの旅をサポートする「あ・える俱楽部」(篠塚恭一代表)

のトラベルヘルパー、若本功祐さん(43)だ。現役のヘルパーで、介護旅行の民間資格を保有している。若本さんは男性が暮らす関西の施設まで迎えに行き、3泊4日の行程を案内した。

感染防止も重視し、レンタカーでの移動となつた。「ビルも増えて、大きな街になつたなあ」。男性は半世紀の歳月を感じながら、当時の名残が薄くなつた。思い出の地をみつめた。

レンタカーがなんだか上り坂に差しかかったとき、男性はふいに涙ぐんだ。「業務報告で札幌の支社へ通つた道だ」。当時の日常が一気によみがえつた。

男性は「大きな契約を取つた」という自衛隊駐屯地を車窓から感慨深く眺め、写真を撮つた。夕食は名物のシンギスカンに舌鼓を打つた。

「北海道を離れて約50年、シンギスカンを食べたことはなかつたな」。男性は若本さんに笑顔を見せた。

翌日は大通公園やテレビ塔、スキノなど、札幌の市街地をドライブした。勤務していた会社の支社にも、少しだけ立ち寄つた。

介助、介護ができる

「トラベルヘルパー」

再訪でよみがえる「若き日」に涙



娘の門出を見届ける

「素晴らしい日になつた」

父親の参列をサポートした。

トラベルヘルパーは、短時間の外出も支援する。がんで余命宣告を受けた70代の父親を「結婚式に呼んであげたい」。長女の依頼を受けて、父親の参列をサポートした。酸素吸入器を携行し、車いすで会場のホテルへ。父親はバージンロードを進む娘の晴れ姿を、笑顔で祝福できた。体調への配慮で披露宴に出席できなかつたものの、「私の面倒を見てくれるいい娘でね。今日は素晴らしい日になつた」と満足そうだつたという。

「今度は、別の赴任地に行きたい。まだまだ会いたい人、見たい場所がたくさんだ。素晴らしい旅をありがとうございました」
「ぜひ、ほかの懐かしい街にも参りましょう」
男性と再会を約束した若本さん。「ご病気のことなど忘れてお

られるようでした。ずっとお元気でいていただきたいと願っています」と話す。
ア・える俱楽部によると、トラベルヘルパーの基本料金は利用者の身体の状況、旅行の内容によって異なるが、一日で2万円(税別、保険料込み、実費別)から。



あ・える俱楽部
篠塚恭一代表に聞く



● 株式会社SPI あ・える俱楽部
東京都世田谷区宮坂3-24-11 1F
電話03-6415-6480

余命宣告後「旅は不要不急じやない」

コロナ禍の経験、新たなバリアフリーに

「あ・える俱楽部」の篠塚代表に話を聞いた。大手旅行会社に勤めていた篠塚さんは1997年、あ・える俱楽部を立ち上げた。「重いカバンが持てないから、もう旅はあきらめる」。高齢の女性客の漏らし

たひとことがきっかけだった。目指したのは、高齢者や障害者を介助、介護する「トラベルヘルパー」が、外出や旅行をサポートする事業だった。

「公共交通機関や旅館、飲食施設

から利用を拒否されることが多く、トラブルも多かった」と、篠塚さんは当時を振り返る。
しかし、1998年に長野で開催された冬季五輪・バラリンピック大会は、施設の段差解消や多機能トイレの設置など、バリアフリーを飛躍的に向上させる契機となつた。

篠塚さんは、旅のバリアフリーの推進を業界や行政に強く働きかけてただけに、2020年に開催予定だった東京五輪・バラリン

ピック大会の延期を「とても残念だ」と悔しそうに話す。さらに、コロナ禍によって「海外はもとより、

高齢者や障害者の旅行は国内でもほぼ100%ストップしてしまいました」という。

それでも、あ・える俱楽部には、旅行や外出サポートの依頼が相次いでいる。篠塚さんは「余命宣告を受けた方々にとっての、外出や旅は“不要不急”ではなく、極めて重要なことです」と訴える。

「当面は観光地の様子を映像で提供するなど、リモートの可能性を限り入れながら、新たな情報発信に努めたいです。新型コロナ禍を今後に活かし、高齢者や障害者が自由に旅行できる環境を広げ続けますよ」とあくまで前向きだ。